

(8) 中村西中学校

学 校 長 山本 博一
校内研究代表者 森原 朋生

1. 研究主題

「生徒が本気で取り組み、力をつける授業づくり」
～対話や議論を生む課題設定の研究を通して～

2. 主題設定の理由

令和2年度の高知県学力定着状況調査の結果を分析したところ、多くの教科に共通して次の3点の課題が挙げられた。①各教科の思考力・判断力・表現力（根拠を示したり問いに正対する文章で表現したりする、論理的な思考や複合的な考え方）、②基礎基本の定着、③学力的に二極化傾向にあり、低位層の生徒への支援が不十分。このような課題が見られたということは、本校が目指してきた「主体的・対話的で深い学び」という、新学習指導要領を具現化した授業づくりが不十分だったのではないかという反省のもと、今年度も昨年度の研究主題、研究仮説を引き継ぎ、授業改善を図っていくことにした。

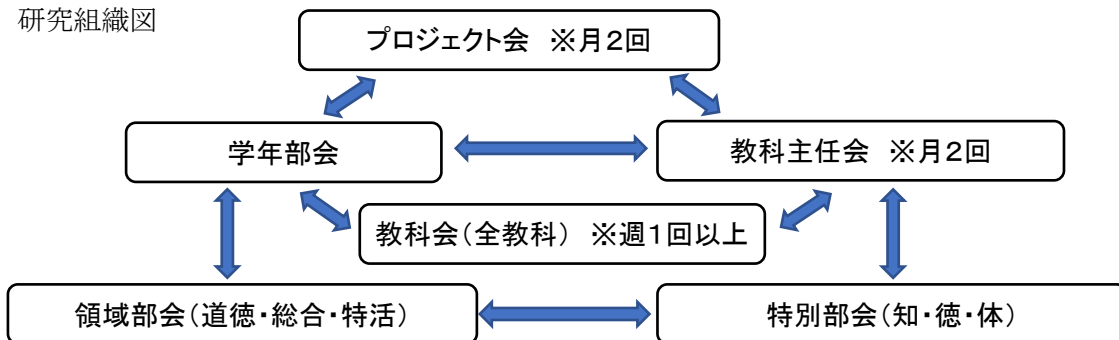
〔研究仮説〕

仮説1：生徒が考えたいと思う課題（必然性のある課題や他者と協働することによって解決できる課題）を工夫して設定すれば、授業に対話や議論が生まれ、生徒の思考力・判断力・表現力が高まるだろう。

仮説2：対話や議論を通して広がったり深まったりした自分の考えを振り返りとして表出させることにより、一人一人の思考の高まりや深まりを自覚させることができ、深い学びにつながるだろう。

3. 研究の進め方と方法

(1) 研究組織図



(2) 研究内容

I 授業研究を中心とした授業改善

- ・全校公開授業研究（年5回）
- ・授業づくり講座の開催（社会科）、授業づくり講座への参加（道徳・英語）
- ・授業スタンダードに基づいた授業者の心構え自己チェック（月1回）
- ・授業評価アンケート（学期に1回）
- ・授業実践レポート（全教員1本）

II 効果的な縦持ちの教科経営

- ・教科主任会（月2回）
- ・教科会（週1回以上）
- ・授業を見合う取り組み（月1回）
- ・チーム会の実施（ミドル会・メンター会・合同教科会）
- ・アドバイザー訪問（年2回）

4. 研究実践

(1) 授業研究を中心とした授業改善

①全校研（年5回）、授業づくり講座（2回）

例年、全クラスが1回は公開授業を行うようにしており、今年度は全校校として5回、そして、授業づくり講座で2回の公開授業を行った。本校の取り組みとして、全校授業研の前には、「授業の見方」とを配っている。また、「研究主題にせまる授業になっているか」を見取るための視点を「ポイント」として明記するようにしている。今年度は、学習指導要領で授業の内容にあたる部分を添付するようにし、他教科の教員も教科特有の「見方・考え方」を共有するようにしている。授業づくりを行う際には西部教育事務所から指導主事を招聘し、生徒の主体性を育む「課題設定」ができていないか、深い学びにつながる「対話や議論」が設定できているか等について指導案を検討し、指導・助言を受けた。

研究協議で出てきた課題については、全体の課題として全教員で共有した。第1回の全校研では「内容ベースから資質能力ベースの授業へ」、第2回では「知識の補完や表出の場面の保障」、第3回では「ゴールイメージ（評価）の明確化」を課題と捉え、全教員が日々の授業の中で意識して実践することによって授業の質を高めてきた。

②授業者の心構え自己チェック（毎月実施）

自己チェックシートは「授業スタンダード」や研究主題と対応したものになっている。毎月17項目について自己チェックを行い、教科会で課題についてどのように対策をすべきか確認している。自己チェックをすることによって授業改善に向かう意識を常に持ち続け、それを教科会で確認することにより縦持ちの授業の質をそろえることを狙いとしている。また、研究主任が全教員のチェックシートを集計し成果や課題を可視化し共有している。

③授業評価アンケート（学期に1回）

今年度は授業アンケートの様式を見直し、15項目あった質問項目を、研究主題に関わる項目、生徒指導の三機能に関わる項目、ICTの活用に関わる項目の7つに絞った。そして、これまで4件法だった評価を6件法とし、5、6のみを肯定的評価とカウントすることとした。これは、これまで生徒の評価が非常に高く、教師の自己評価との差が大きかったため、より実態に近づけることを狙いとしている。

④教科実践レポート

全教科が重点単元を決め、新学習指導要領で求められている資質・能力の育成を目指した授業づくりを行い、その工夫点や成果・課題をレポートにまとめて年度末の校内研で発表会を行い、共有している。

(2) 効果的な縦持ちの教科経営

①教科主任会（月2回）

主幹教諭が中心となって計画し、全教科体制で実施している。今年度は、単元ゴールを重点課題として設定し、単元の目標やめあてについて全教科で形式を統一して作成した。教科主任会で話し合った内容については教科会で周知するようにしている。また、本校独自の取り組みとして、授業改善プランの全教科版（県教委のものは5教科が対象）を作成し、全教科のベクトルを合わせている。

そして、教科と学年の取り組みのベクトルを研究主題に向けてそろえ、可視化することを狙いとし、主幹教諭が中心となり、「校内研究主題と教科、学年の相関図」を作成している。（右図）相関図を作成し、学期ごとに共有、見直しを図ることで、教科間、学年間のつながりを意識することができ、縦・横のライン機能を強化することにつながった。

令和3年度校内研究主題と教科及び学年の相関図



②授業を見合う取り組み

他教科の授業実践を自分の授業に生かすことや、ベテラン教員と若手教員の OJT をねらいとして、月に 1 回以上、自分の担当教科以外の授業を参観している。参観者は授業参観カードに記入し、主幹教諭が統括し授業者に還元し、その後教科会で共有し授業改善につなげている。

③単元の振り返り

200 字でまとめるこの単元の振り返りは、教科の専門用語を使うことや、本校の課題でもある「根拠に基づいた考えの表出」などを狙いとして全教科で取り組んでいる。生徒の振り返りには具体的な評価を加え、他の生徒の参考になるように紹介している。

④チーム会の実施

本校の世代別人数は 20 代、40 代が多く、特に若年教員の割合が多い。授業改善をすすめる上で、どの年代も力を発揮できるようチーム会を実施した。これらの会は、本校に在籍しており、高知大学の教職大学院で組織力向上について研修している石川教諭がコーディネーターとして関わっている。ミドル会はミドルの役割の自覚や若年教員へのサポート、メンター会は学校組織の理解や自主的な授業改善、合同教科会は他教科の実践に学び教科横断的な視点を育成することを狙いとして実施した。

⑤アドバイザー訪問（年 2 回）

「組織力向上のための実践研究事業」として、西部教育事務所の松田アドバイザーに全授業を通覧していただき、授業改善、及び教科主任会の在り方について指導助言をいただいた。その内容は主幹教諭が次回の校内研修で周知したり、教科主任会を通じて教科会で周知したりした。

5. 今年度の成果と課題

授業者の心構え自己チェックを見てみると、5 月は達成率が 80.7%だったが、11 月は 88.7%と目標値である 90%に近づいてきている。また、学校評価アンケートでは研究主題に関する項目において、どの項目も肯定的評価が 90%に近かったが、その中でも振り返りについての評価が低くなっており、これは教員の自己チェックとも重なる結果となった。12 月に実施された高知県学力定着状況調査については、自校採点の結果を受け、各教科で作成した分析シートをもとに全教員で共有を行った。その際、生徒が苦手としていた問題を教員も解いてみた。そして、各教科での課題と、それに対応する取り組みを一覧にし、教科共通の課題についてまとめ提示している。

【成果】○単元の目標を立てて単元構想を組み立てていくといった取り組みを続けることで、教科会の質の向上が見られた。

○チーム会を通じて、若年教員と関わるミドルの意識が向上した。

○単元ゴールをイメージした課題設定の工夫に全教科で取り組むことで、西中スタンダードにもとづいた授業がどの教員も一定できるようになってきた。

【課題】▼若年教員への支援の弱さが見られる。

▼チーム西中の一員として他と協働する意識に弱さが見られる。

▼生徒の課題に対応する授業づくりが不十分である。

▼複数の資料をもとに読み解く、論理的に答えるといった問題の正答率が低い。

これらの課題について、来年度に向けて組織としてどのように対策をしていくか検討する。来年度は中学校再建に伴う統合により、新生中村西中学校がスタートするにあたり、これまで積み重ねてきた西中スタンダードをさらに発展させられるよう研究を続けていきたい。